

東京旭川会 会 報



第17号 発行所 平成 8 年 (1996) 2 月 28 日発行
東京旭川会 〒163-13
東京都新宿区西新宿6-5-1
新宿アイランドタワー10F
東京美装興業株式会社内
TEL.(03)5322-2725
編 集 東京旭川会広報委員会

〈第10回〉郷土訪問の旅

〈平成 7 年 6 月 29 日〜7 月 2 日〉

さわやかな空気を

故郷旭川と東京を堅く結ぶ郷土訪問の旅も第十回となった。一九九五(平成七)年の郷土訪問は六月二十九日から四日間だった。今回の第十回「郷土訪問の旅をもつてしばらくこのイベントはお休みさせていただくこととなります」という事務局からの添え書きがあった。何となく淋しいような物足りないような気がした。しかし、これまで実施して下さった事務局や旅行委員の方々のさまざまなご苦労を思えば感謝するとともに、やはり淋しさは否めなかった。

港建物が移転してから「郷土訪問の旅」は初めてだったため、ロビーが広く集合場所が分からなく右往左往する方もあった。

〔旭川空港〕東京は梅雨空。旭川は青空。空気は澄み、爽やか。多数の旭川市側の代表のお出迎えをいただいた。元東京事務所所長の須貝肇彦さんの顔も見え、挨拶の間もなく三台のバスに分乗して、昼食会場へ向かう。故郷のシンボル大雪山の連峰が裾からだんだんに姿を現してきた。

〔歓迎セレモニー〕会場は今回初めて旭川クラシックヒルズ。従来の昼食会場は高砂台レストハウスであった。旭川クラシックヒルズは、神楽岡公園の前にあって、石造りのモダンな外壁と石畳が美しい。この一つ一つの石は三条十七丁目にあった銘酒登鶴の酒蔵を解体し再生させたとのこと。明治末期から大正、昭和の三代を呼吸してきた石であり、再び平成の新しい時を刻んでいる。



「歓迎 東京旭川会 御一行様」

第10回東京旭川会郷土訪問の旅 平成7年6月29日 於大雪ビール工芸館

郷土料理に美酒

「懐かしい友との語らい」

〔市内施設見学〕昼食後、再びバスで市内施設見学に。上川神社を経由して忠別川を通る。ここで水を堰止めたプールで泳いだり、河原で飯盒炊飯をしたことを思い出した。ポプラの綿毛が飛んでいた。雪虫かと見違えるほど。よく整備された三九三号線へ出る。昔の永山通り、今は通称パチンコ通りといわれているとか。

〔男山酒造り資料館〕旭川の地酒にとどまらず全国的な銘酒男山は今から三百年ほど前、関西の伊丹で醸造を始め、江戸時代から名酒として賞味されていたとのこと。將軍家のご膳酒ともなり、頼山陽、井原西鶴、近松門左衛門や文人蕨村らも愛飲し、激賞したとか。天明の頃の長唄の一節にもあり、歌麿の浮世絵の中にも男山のコモ冠の樽が置かれてある。庭に出て男山など各種のお酒の試飲(きき酒)で、一同ほろ酔い気分。男山

ルズは、神楽岡公園の前にあって、石造りのモダンな外壁と石畳が美しい。この一つ一つの石は三条十七丁目にあった銘酒登鶴の酒蔵を解体し再生させたとのこと。明治末期から大正、昭和の三代を呼吸してきた石であり、再び平成の新しい時を刻んでいる。

昼食会で、まず菅原功一旭川市長は「板東徹市長の後を引き継ぎ二十一代目の市長に就任いたしました。昭和五十七年から十回にわたって故郷旭川へお出でくださり、東京旭川会の皆様に旭川市を応援していただき感謝しております。この建物のある神楽岡周辺も変わりました。しかし、都市機

能をもち、自然を失わない町を見直し発展させたいと思います。皆様、ふるさとを存分に楽しんでください。三十六万三千人の旭川市民を代表して心から歓迎いたします」と述べられた。

これに対し訪問団を代表して矢野正康団長は「第十回郷土訪問団六十二人無事到着いたしました。市当局こそつてお出迎え、そして菅原市長には市議会開催中というご多忙の中を駆けつけていただき、ありがとうございます。旭川市に對して、昔のまま残っていてほしいという思いの半面、近代都市として大いに発展してほしいという二面の願いがあります。大雪山連

峰そして広々とした平地を眺めると『ふるさとへ帰って来たのだなあ』と感じます。都市は年々発展し変貌を遂げています。市長さんはじめ皆様のご努力にさらに応援していきたいと思えます。東京はオウム事件など騒々しいが、ここ旭川はさわやか。美味しい空気を満喫して帰ります」さらに川原俊男旭川市長公室長は「時間の許す限り、お腹いっぱい召し上り、ふるさとを満喫してください」とおっしゃり、金森耕三旭川観光協会会長は「お帰りなさい。皆様切なふるさとお預かりしている私共一同、旭川のますますの発展のため頑張ります」と述べ、乾盃となった。

仕込みの延命長寿の水も人気があり、岩から流れる水を子杓で飲む。この水は大雪山連峰に幾重にも歳を重ねてできる万年雪が源となる。伏流水となつて地下水脈をゆっくりと鍾乳洞や石灰岩層を潜り流れているとのこと。ポリタンクを持って水を汲む人も目立ってきたそう。

〔永山市民交流センター〕東京旭川会から贈った三浦白瑠画伯の絵画が大雪山アイスアリーナから移して掲げられてあつた。元東京事務

利尻富士は招いた

私たち六十二人を乗せた、全日空機は予定通り旭川空港に滑り込んだ。梅雨のうつとしい毎日が続く首都圏と異なり初夏の陽光がさす爽やかな空気が流れ、北海道の素晴らしさを感じた。バスは直ちに神楽岡の上川神社横にあるクラシックヒルズに向かい、菅原旭川市長はじめ多数の方々が顔をそろえて歓迎会が開催された。

歓迎会のあと、市内見学にバスを連ねて出発したが、私は別行動となり美瑛の丘を眺めてきた。ラベンダー畑はやや時期が早く薄い紫色に染まり始めていたものの、緑や黄色の丘が緩やかに弧を描く美しい風景が広がっていた。昔はせいぜいスズランの自生する土地という印象しかなかったのに、いまやヨーロッパの田園風景を思わせる美しさで、本州の人たちを魅了するようになったのは、拓真館の前田真三氏の写真の影響が大き

所長の坪田賢一さんがこの中の「生き生きセンター」の所長をしていた。

さらに井上靖記念館、彫刻美術館を経て旭川駅前旭川ターミナルホテルにて解散となるが、続いて六月二十九日午後六時から市内三条七丁目A1ビル地下のいろは居酒屋で矢野団長はじめ会員三十四人、旭川市側から菅原市長ら多数が参加した。

この夕食会は旭川市の歓迎昼食会に対する感謝の懇親会である。

いのではないかと思つた。まことに日本離れた雄大な美しい景観である。

翌三十日はJRで稚内に向かう。稚内に近づくとつれ雨天となり、稚内公園の氷雪の門など眺める頃は風雨が強く、樺太を展望するなど到底望むべくもなかった。ここからフェリーで利尻島の鴛泊港に向かった。船内は大変な混雑で小さな港町にこれだけの人数を収容できるのかと心配になった。翌朝は曇つてはいたが、風雨はおさま

東京旭川会事務局局長桑本平八さんの司会で進行。則末誠一旭川市助役が「ようこそお出でくださいました。平成六年十一月からの若葉マークの助役です。以前は市の収入役で国際バーサー大会でお世話になりました。旭川はこのところ天候が不順ですが、空気が澄んでいて、夜になると車で深川、留萌あたりから夜景を見にやってきました。嵐山に夜景を見る施設をとの声もあります。明るさと暗さのコントラストが素晴らしいといわれ

どこからも利尻山を見ることができるといわれるが、雲はすっかり晴れ利尻富士と親しまれる美しい山はその全容を見せ、飽きることなく眺められた。

「島全体が一つの山を形成し、しかもその高さが一七〇〇メートルもあるような山は、日本には利尻岳以外にはない……。島全体が一つの頂点に引きしぼられて天に向かっている。こんな見事な海上の山は利尻岳だけである(原文のまま)」と日本百名山で、深田久弥は述べている。

翌日は広大な天北・サロベツ原野をバスで走り、遙かに見える利

ます」と挨拶。菅原旭川市長も市議会が終わって駆けつけ「おぼんでございます」などと懐かしいご挨拶のことばで参加された。



夏もひんやりさすがは北の国

美しい水晶の町に

矢野団長は語る

十回に及ぶ郷土訪問旅行で合計四回にわたり団長のお役目を果たしていただいた矢野正康さんは、思い出を次のように語つた。

「東京からの郷土訪問旅行は個人的に郷愁にひたるばかりでなく、旭川市発展のために様々な効用を果たしてきたのであるまいか。今回の第十回訪問でも菅原市長はじめ関係各方面にお手数をおかけした。改めて厚く御礼を申し述べたい。

郷土と対面していつも思うのだが、クリスタル・シティーの名の通り、旭川は水晶のように常に美しく輝いて欲しいと願っている。さわやかな北海道の中で旭川の美しさはひととき素晴らしい。大雪山の連峰、豊かな流れの石狩川に

▼ゴルフへの誘い▲

ゴルフ同好会ではこの四月ないし五月にコンペを予定通り開催します。詳細は同好会員にお知らせしますが、新規申し込みの方は、本間敏弘親睦委員長(☎〇四二三一八一六八六三)へ。

心の安らぎと不変のものをいつも感じる。

これが旭川の魅力であると考え。ただ私の少年時代から見てもない。永山から近文にかけた石狩川のほとりでよくキャンプをしたが、当時、川の水は飲料水に使えた。

いま行ってみるとナマでは飲めない。これなどクリーンにして欲しい。とともにスイスの都市で見かけるような白ないしクリーム色の街並に仕上げる事ができないのかと思う。美しい旭川、クリスタル・シティー旭川。私たちが在旭川人はできるだけの支援を続けたいと考える」

「郷土訪問の旅」10 回の歩み

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	回
6月29日	8月31日	6月4日	8月24日	6月3日	7月31日	10月14日	7月24日	9月30日	10月11日	出発日
62名	84名	72名	12名(うち青少年3名)	93名	125名	54名	80名(うち青少年17名)	66名	98名	参加人数
「利尻・礼文の旅」38名。 										

もつと旅行を続けて

寺田 英子

幹事役の皆さんにお手数をかけていますが、同郷の人たちと和気あいあいと旅をするのは楽しい。どういふ形にしても年一回は旅行会を開催していただきたい。

旭川の土の味を

花輪 元治

旅行は毎年やっていただきたい。過去十回のうち、子供連れが二回あったが、皆さんに親子ともども好評でした。やはり「旭川の土」に親しむことができたのはよかったです。利尻・礼文や道東の旅までいなくても旭川の近郊でイモ掘りするのも、ラベンダーの野を観賞するのもいい。手

近なところで思い出に残ることを続けて欲しい。

もつぱら「黒子」役

堀川 和延

当方はもつぱら「黒子」役なので、とくに申し上げることはありません。旅行のこともさりながら、第二十回総会を機に幹事役を若手かまだやっていない方と交替させていただきます。よろしく。

さらに検討中です

本間 敏弘

会主催の旅行は毎年行うとして、旭川訪問旅行は三、四年に一回でいいのではと考えています。あとは東京の近県への旅行ではないかかと思ひ、いま親睦委員会としても検討中です。

第19回・東京旭川会

総会・懇親会 にぎやかに開催される 19回東京旭川会



左から五十嵐広三元官房長官、佐々木秀典氏ら同会の先生方も。

東京旭川会の第十九回総会・懇親会は平成七年十月十八日、例年より三十分遅れて午後六時三十分、東京・新宿の京王プラザホテルでにぎやかに開催された。

当日、会場には高野哲男実行委員長をはじめ幹事らが早くから集まり、準備を進めた。壁面には旭川市の美しい四季を彩るポスターがはりめぐらされ、ロビーには産地直売の海産物が並べられた。旭川市から出席者へのお土産「新米きらら」「旭川ラーメン」市のパンフレットなどの袋詰めも終わった。六時前から次々と出席者が見え、あちらこちらに久々の再会を喜ぶ姿があった。

午後六時三十分総会開会。本間敏弘幹事の司会で進められた。議長は会則により八木祐四郎会長が勤め、桑本平八事務局長から三つの議案の説明があった。

第一号議案(平成六年度事業報告並びに決算報告)によれば、退

会者及び三年以上の会費未納者三百氏を除籍したので、現会員数は五百三十氏となった。年会費の納入状況がよかったことと会員数減少による支出減もあり、例年より繰越金が多かったという。第二号議案(平成七年度事業報告並びに予算案)を資料により詳細に説明。例年通りに予算を組んだ。年会費については会員五百氏を確保したいとのこと。続いて植木宏昌監事より「平成七年九月十一日東京美装興業株式会社で黒崎弘監事と平成六年度財務監査を重点に事務処理全般にわたって正確に処理されていることを確認しました」と監査報告。以上三件の審議は満場一致で可決した。第三号議案(役員改選の件)は会場より「八木会長のご尽力に敬意を表します。JOCの役員等でお忙しいお体ですが、東京旭川会のためご留任を願いたい」の発言があり、満場拍手。これを受けて八木会長も「桑本事務

局長ほか副会長や幹事の力をお借りしてさらに一期つとめさせていただきます。その他の役員も副会長はじめ他の幹事と相談し決めさせていただきます」としめくくり、総会は滞りなく六時四十八分終了した。

引き続き懇親会、司会は加藤桂子幹事にバトンタッチ。改めて八木会長ご挨拶「菅原市長に初めてご出席いただき意義深い懇親会になります。大雪山は十月十三日初冠雪。冬の訪れで私は忙しくなります。多事多難な年でしたが元氣な姿で年を切り切って、年一回お会いすることを元氣に引き継いでいきたい」。ミス旭川安田智津嬢から八木会長へ花束贈呈。続いて菅原功一旭川市長が、登壇して「おぼんでございます」と懐かしい言葉で始まるご挨拶、初めてご出席の菅原市長、お若い市長の歯切れのいい言葉に耳を傾けた。矢野副会長をはじめ多勢の旭川商業の先輩が見守っていた。ついで会から菅原市長へ旭商後輩の海老沢美智子幹事から花束贈呈、桑本事務局長から来賓と五十嵐広三、佐々木秀典、今津寛衆議院議員ら国会議員紹介があり、一同を代表されて佐々木秀典衆議院議員が挨拶した。

「菅原市長初めての旭川会ご出席で若々しい市長さんが新しい世紀に向けて頑張っている姿は頼もしい限りです。国会は補正予算審議中、私は予算委員をやっている。オウムの問題など対処すべき問題は多い。衆議院議員の選挙制度が変わり大変だが、旭川のために頑張っています」と述べると、遅れて参加の五十嵐広三元官房長官は

「官房長官として四百五日間いろいろあつて皆様をはらはらさせたのではないでしようか。無事終わりました。あり難うございます。先日旭川で記者会見がありました。が、私は三十七歳で全国一の若い旭川市長に就任してから三十二年になります。建設大臣、官房長官をつとめ、来年三月七十歳になりますので、ここで引き退りたいと思います。完全燃焼できたという満足感があります。長いご支援に感謝申し上げます。まだ任期中で今日補正予算が成立し、旭川関係の予算は一〇〇パーセント要望に応えられ、駅周辺再開発、来年から十年くらいかかるが、千二百二十億円くらい予算で旭川としては画期的な開発で軌道に乗ることを嬉しく思います。二十一世紀を目指して旭川はこれからです。東

京旭川会のご支援をいただき一層発展するよう期待しております。来年からは旭川で皆様がお出でになるのを待つております。長い間のご支援をお礼申し上げます」と感慨をこめてお別れの挨拶。故郷の話に聞き入っている間に宴会の準備も整い会食になった。まず乾盃、大西正剛旭川市議会議長の音頭で「五月に二十四日目議長に就任、このような盛大な東京旭川会に参加できることを光栄に思います。旭川市はいろいろなことを手がけていて大きく変わるでしょうが、一つ一つが東京旭川会の皆様の思い出のある町だと思います。六月の郷土訪問の旅で矢野副会長に旭川もキレイな町になったと褒めていただき嬉しかった。今夏甲子園で旭川実業が準々決勝進出の活躍を喜んでいただけたと

思います。ますますの繁栄を祈ります。乾盃」と杯をあげた。郷土の産物も盛り沢山。カボチャ、ゴシヨイモ、トウキビの懐かしい味に満足、郷土の地酒やワインもずらり。その間に祝電披露があり、武田陽子幹事登場しての抽せん会。抽せんの引換券を手当たり番号にどきどき。とくに最後の旭川往復航空券の当たり番号発表には歓声や諦めの声にざわめく。最後に旭川市商工会議所、会頭代理、専務理事柳谷宏氏の万歳三唱で総会・懇親会は八時三十分終了した。今年は菅原市長が初めての参加であり、歓迎ムードがいっぱいで市長も一つ一つテーブルを回り話をされ、カメラにおさまる。また五十嵐元官房長官のまわりにも多勢の人が集まって長年のご苦労を労ったり、感謝した。

菅原旭川市長のご挨拶

平成六年六月十七日に第二十一代の市長に就任した新米ホヤホヤの市長でございます。

旭川市は年々躍進しております。旭川駅周辺九十ヘクタールの広場

〈新幹事に四氏就任〉

東京旭川会の平成七年度第二回幹事会は96年1月30日、九段会館で開催、健康上の理由などで村井与吉顧問、折登建憲幹事が退任、新しく尾崎請亮、中村泰敏、引地康博、安井規雄の四氏が幹事に就任した。

を活用して新しい地域を作ろうと頑張っています。旭川空港も二千メートルから二千五百メートルに拡張整備、九州へも飛行機が飛ぶようになっています。来年あたりは東北にもと考えています。また、地元産業、文化、教育などいろいろな政策を手がけております。ここ数年旭川にダイレクトにお客が来るようになった。北国にこんなきれいな大きな町があったのか、都市機能をもった自然の条件がそろい自然と調和をもった町を見て、先般の全国建築学会で来旭の大学教授がカルチャーショックを受けたとか、オーストリアの大使

■原稿募集

会員の皆さまから本紙の原稿を募集しています。故郷の思い出エッセーでも、北海道に因む小論文でも可。原稿は返却しませんので控えをおとりください。千字以内とします。宛先は東京旭川会事務局

第19回総会・懇親会出席者

(順不同)
(敬称略)

雄、牧野哲雄、向井地和子、室谷文治、造酒多津男、三宅一郎、三浦清史、南むつ子、湊治、森田澄、八木祐四郎、矢野正康、山口道弘、安井規雄、山口和夫、山内幸子、山本勝也、吉崎与一、横川正市、吉田ゆみ子、吉川昌伸

以上百三十六氏



懇親会場で話に花が咲いた。

故郷懇親会出席者

〔旭川市関係者〕▽旭川市長・菅原功一▽助役・則末誠一▽旭川市議会議長・大西正剛▽旭川商工会議所専務理事・柳谷宏▽旭川観光協会副会長・稲村健蔵▽市企画調整部次長・斉藤和雄▽旭川市長公室長・川原俊男

〔旭川市東京事務所OB〕

▽市緑地公園協会事務局長・須貝義彦▽永山市民ふれあいセンター所長・坪田賢一▽市管理部長・古川勝吉▽市商工部次長・今井良三▽市都市拠点開発部事業課主査・天野裕次▽市農政課農政企画係主査・津村利幸▽市総務課行政係主査・林徳一

〔東京旭川会会員〕

矢野正康団

足立景子、五十嵐広三、伊藤一男、伊集院実、井上恵三、池林隆男、植木宏昌、氏家一衛、梅原音二、海老澤美智子、遠藤義希、大城榮子、大久保藤次郎、小川礼子、大村高久、折登昭三、大野武夫、大野八代子、荻原京子、起田秀夫、岡田直子、大沢テル子、尾崎靖亮、加藤辰雄、加藤桂子、笠原貞夫、風間昶、亀井欽一、笠原ゆり子、木野稔、神部泰、黒崎弘、桑本平八、窪田稔、窪田敬昭、栗村実、工藤英興、工藤暁子、北川いづみ、鴻上修一、後藤邦子、後藤正男、小林栄二、小宮達四郎、小柳武二、小林小容、佐々木秀典、佐々木雄一、佐藤貢、佐藤征司、佐野雄二、作間亜矢子、斉藤弘明、島田嘉明、直原綾子、茂川トヨ、島礼弘、島影均、須藤智恵子、杉山恵子、鈴木吉之、末木貴茂、関晃、関口緑、関口トシ子、清光照夫、宗方裕、宗方由美子、曾我部俊文子、竹村政芳、武田陽子、高橋文子、高畑敏、高橋英治、高田保、高橋正夫、高野哲男、竹原茂雄、田中幹夫、田高良茂、田中正躬、高尾榮二、寺田英子、土井磨智子、豊田和郎、中井律子、中本和子、中村敏江、中村泰敏、中塚晃介、中村園子、中島信、並木治子、長瀬汎、西田育子、西村明、花輪音三、花輪元治、長谷川健一、橋本裕子、橋本博治、長谷孝子、原田寛、長谷川満、広野貴之、引地康博、平岡美恵子、福田淳一、古昌誠一、福内一二、本間敏弘、堀川和延、松原利治、松原益子、松島薫、増子正

私財三億円を投じ全国の青少年のための「音楽教育振興財団」を設立、さらに二千万円で郷土旭川の中小校生徒、児童のため「教育振興基金」を設けた旭川出身者が東京にいる。その名は三浦規(みうら・ただし)さん(写真)という音楽教育事業家だ。明治四十五年、礼文町生まれ利尻をへて、旭川に移住した。実は本会副会長の矢野正康さんに「全国に通じる旭川出の事業家はいませんか」とうかがったところ、「昔の旭川師範学校出で三浦さんという方がいる。高齢なおカクシヤクとして東京音楽図書株式会社の社長」といつて紹介された。

三浦さんのお名前を知らなくても、旭川の買物公園、デパートの丸井前にある「望郷の鐘」はご存じだろう。高さ約六メートル、三本の鉄骨に計十二個のカリヨン(鐘)がタテに並び朝八時から夜八時まで一時間ごとに懐かしのメロディーが流れている。これは旭川開基百年を記念して三浦さんが三千万円で建てて故郷へ寄付されたもの。そこで、中野区中野二丁目の東京音楽図書ビルに当の三浦さんを訪ねてインタビューを。

「望郷の鐘」をふくめ合計三億五千万円も公共のため寄付されたのは、恐らく旭川では三浦さんが初めてだと思ひまして――。

「いや、いや、お恥ずかしい。奉仕させていだただけです。家内と十八年前に死別し、娘三人も結婚してそれぞれの道を歩んでおりまして一人暮らしなのでせめ

てできるだけのことを考えたまででお恥ずかしい」

――ご経歴を拝見すると礼文島出身で小学校の先生をされていた父上の勤めから利尻に渡り小学校三年までいて、神楽小へ転校、昭和四年に旭川中学(現、東高)を出て、旭川師範学校二部に進まれた。当時、旭師の入学は難関でした。ね

「そうでもありません。当時、師範二部は旧制中学五年から入りました。一年制で一学年三十五人ぐらい、小学校の高等科からくる五年制の本科は約二百人、ともに競争率は五、六倍だったでしょう」



「音楽こそ人間にとって最高の心の糧」と提唱

三浦 規

――私の仲間に旭師出で紋別出身の結城義照という秀才がいました。私とは東京の私大で同窓でしたが、実によくできた。戦後、彼は東大法学部へ進み、在学時代、高等文官試験司法科に合格して弁護士になった。惜しむらくは栄養失調で亡くなりましたが……。

――旭師の学生たちが、かつて左翼運動と目された綴方教室事件を起こしましたね。やはり貧しい秀才たちだったのでしょうか。

「あの事件で私の同級生も何人か警察に捕まりました。学校の生活綴方教育を通し左翼思想を吹き

込んだという容疑です。たしか綴方の研究グループがにらまれて五人捕まり一年半ほどぶち込まれた。これは誤認で、冤罪ですよ。

旭川の作家三浦綾子さんが『銃口』という小説でこの事件をとりあげています。この中にのちに東京・神田の教育出版会社の二代目社長となった小坂佐久馬さんもいた。

事件の首謀者と目されて追及されました。この方は東京旭川会のメンバーでした。同じ時期に綴方とは別件で、美術担当の先生、熊田さんも左翼とにらまれ捕まりました」

――当時、師範は旭川、札幌、函館の三校だけで、他に文科系の大専門学校は小樽高商(現、商大)しかない。文科系の異才は師範学校に集まったのでは。

「いや、いや、そうでもありませんが、授業料は全額官費だったので貧乏人の子弟が寄ってきまして……」

(三浦さんはその後旭師二部を昭和五年に出て永山、富良野小学校訓導、富良野高女音楽科教諭、同十四年に旭師付属小の訓導などを勤め海軍に應召、衛生兵長。戦後旭師に戻って同二十四年、教育

出版社をへて、いまの音楽教育図書会社に入り現在、会長。著書も「小学生の音楽」はじめ二十点近くあります。正にこれは馬車ウマの如く駆けまわった半生のよう。当人は「私はあえて明治生まれの『暴走族』といっています。音楽図書の販売で盛んな時は月のうち二十日間は地方出張で駆けまわりました」とおっしゃる。

お話をうかがっていて三浦さんから熱気が伝わってくる。人生のスローガンは「音楽は人間にとって最高の心の糧」というもの。



――神楽町助役まで勤めた父、林佑(りんきち)さんの「背中を見つめて歩んできた」とある。

――ところで三浦さん、望郷の鐘への想いは。

「父親の林佑が利尻で小さな小学校の校長をしていたおり、校長官舎と学校がくっついていて、私はよく学校のオルガンを鳴らして音楽に親しみました。旭中時代にハーモニカ・バンドに入り旭師へいくと音楽は重要な科目なので夢中で勉強しました。これらが音楽教育にかかわりあうようになった

理由でしょう」

――開基百年に三浦さんが故郷に贈った旭川讃歌「北の街に鐘は鳴る」の三番に「鐘よひびけ、ひびけ、新しい日に、星の砂子を、ちりばめて」とあります。三浦さん自身がロマンと理想を追ったのだろうと推察しましたが……。

「かえりみるに、わがふるさとにかなる文化があるのだろうか」と考えると、ちと悲しくもなります」

――例の倉本聡が北の大地の集落に「悲別」という新地名をつけましたが「内地」側に「悲別」なんていわれると「哀別」であり「怒別」です。「望郷の鐘」は悲しくも哀れでもない「希望の鐘」であって欲しいと願うのですが。

「私はかねて北海道開発、旭川発展のために考えなければならぬことが、とりあえず三つあると考えた。一つは『北海道開発庁』の名称です。それならばいまの北海道はなお未開発なのか。旭師は戦後、北海道教育大旭川分校となり、最近になってやっと『分』がとれて旭川校となった。しかし単独で独立した大学とはなっていない。

さらに重要なのは旭川を首都とする『旭川県』ないし『新北海道』の開基である。いまのような札幌一極集中では、わが旭川は常に二番手、三番手にまわされる」

――ご所見、ありがとうございます。旭川市の東京事務所もやる気まんまんとかがついていますので大いに期待したいと思ひます。

ふるさと旭川を広く知ってもらおうと、旭川市では一九九五年十月から「旭川観光大使」というユニークな広報を考え、歌手の伊東ゆかり、将棋名人の小林光一、オペラ歌手・五郎部俊朗、演歌歌手・水田竜子、東京音大教授・川島伸達さんや宮崎県都市に住みながら旭川大好きで、もう三十七回も来旭している池袋孝さんら五十七氏に「旭川市観光大使」を委嘱、

クの店を開く渡部せつさんが旭川出身で、伊東ゆかりのドレス・デザインナー。こんな縁からもう二十年も前から、彼女は旭川を訪れ、ニスやスキーを楽しむようになり、年一回、バルコ劇場でコンサートを開催するまでに。

所属する音楽事務所によると、あの大雪の山々に包まれた大自然の旭川が、お気に召して第二の故郷となった。年に何回も旭川を訪れ

旭川観光大使 伊東 ゆかり



機会あるごとに旭川のすばらしさ、良さをPRしてもらうことになった。

て、友達になった人たちとの交流を重ねている。

●五十七人の大使のなかで異色は伊東ゆかりさん(写真)。本名は信子、昭和二十二年四月六日、東京生まれの四十八歳。同三十四年に「クワイ河マーチ」でデビュー、同四十二年、「小指の想い出」がヒット、スターの座へ。旭川とのかかわりは東京の南青山でブティッ

「旭川観光大使の人びと」▽池城康朗北海道新聞東京支社長▽池永孝都城ときめき大学運営委員長、来旭37回▽石塚征雄NHKチーフディレクター▽伊藤健介実業之日本情報編集長▽伊東ゆかり歌手▽井上知一横浜馬車道商工会理事

長▽猪瀬英雄ANAケータリング重役▽伊吹吾朗京都市俳優▽岩田公雄読売TV解説委員▽宇田津一郎宮崎西高校長▽大竹竜雄日産労組副会長▽小沢康人ANAスカイパル重役▽折返章子NHKお天気キャスター▽海原卓作家▽片桐麻美シンガーソングライター▽金平茂紀ニュース担当デスク▽川窪正昭NHK広島放送局長▽川島雅昭NHKアナウンサー▽河内達雄阪神百貨店広報課長▽川籐幸三プロ野球解説者▽木野工作家▽日下公人多摩大教授▽小林昭東芝広告部長▽小松左京作家▽五郎部俊朗オペラ歌手▽笹々戸千津子彫刻家▽佐原美子日本エアシステム室長▽島影祐司ふじや会長▽島津良昭テレビ大阪▽陣幕克昭大相撲親方▽菅井尚伸テレビ朝日▽鈴木貴久近鉄バファローズ選手▽千田利史電通総研プロデューサー▽高木利武東芝中部支社長▽高宮行男代々木ゼミ理事長▽武内英三中小企業公庫部長▽竹村健一評論家▽多田昭重西日本新聞編集局長▽玉置浩二歌手▽豊沢敬一郎神戸大教授▽永井扶北海道新聞東京支社事業委員▽永山武臣松竹会長▽野村玲子舞台女優▽原一平タレント▽藤田和日朗マンガ家▽古川昭一日本エアシステム副支店長▽ポール牧喜劇役者▽星野伸之オリックス選手▽本間正俊東芝システム部長▽水田竜子歌手▽八木祐四郎JOC専務▽矢野正康セーキ社長▽山崎勝彬日本エアシステム支店長▽渡部せつデザインナー

ふるさとウィークス

さつそう 花みこしも

八月三日から五日まで、「旭川夏まつり」が開催、町場の女性だけの集い、華酔会の「花みこし」(写真)もさつそうと登場、双肌ぬい



で短パン姿の女の軍団がかけ声も勇ましく「人間みこし」をかつぎまわった。そういえば旭川の女御は開拓らしい強し。

63回音楽パレード 盛大

恒例の第六十三回北海道音楽大行進(北海道タイムス社主催)は六月五日開催、幼稚園の鼓笛隊から高校生らのブラスバンドなど、参加規模日本一と自慢の音楽パレードが護国神社をスタート、旭川

「埼玉産直」の雨 紛ばやし

駅まで延々と続いた。写真はよい子たちの鼓笛隊。



旭川市神居町上雨紛に「伝統芸能」が産声をあげた。といっても埼玉県新座市大和田に伝わる「大和田雛子」を同市出身で五十年前に開拓団として入植した高橋剛三郎からそっくり導入して、その名も「雨紛ばやし」(写真)と命名して、鬼めがテレックテンテンと太鼓にあわせて面白おかしく踊ると、オカメとヒョットコも加わり笛、太鼓、鐘のおはやしに乗って五穀豊穡を願う雨乞い。昭和五十六年から雨紛小学校で「ふるさと学習」の一コマとしてとりあげられた。いまでは親連三十七人、中学生の子供連十一人、準会員の高

石川啄木と旭川

山の散人(エッセイスト)

毎週日曜日になると、私にはさ
さやかな楽しみがある。朝日新聞
日曜版の「朝日歌壇」はじめ各紙
に読者の俳句、短歌が顔をのぞか
せるからだ。いうまでもなく、こ
れら日本の短編詩は日本語の精を
凝縮させたものであろう。これと
いう歌は赤鉛筆でマークした上、
切り抜いて保存している。

といって当方は歌詠みではけっ
してない。旭川にいた十代の頃、
ふと読んだ石川啄木に魅せられて、
いまも啄木をぬけ切らずに、盛岡
に、釧路に、果ては京橋辺りをう
ろちよろして席が定まらない。さ
て、その啄木とわが故郷旭川との
ふれあいをご存知だろうか。こん
な歌が残されている。(「啄木歌集」
岩波文庫から)

名のみ知りて縁もゆかりもな
き土地の宿屋安けし

我が家のごと

短歌には珍しく三行詩だ。これ
は明治四十一年、啄木二十二歳の
時、小樽日報をとり出して釧路新
聞に赴任の車中で詠んだ一首であ
る。「名のみ知りて縁もゆかりもな
き土地」とは、これはもうまぎれ
もない、わが故郷だ。啄木は函館
本線で旭川にやってきた。

乗合の砲兵士官の

剣の鞘

がちやりと鳴るに思ひやぶれ
き

指揮刀のサーベルをがちやつか
せた野戦砲兵第七聯隊の士官たち
である。さり気ない一首は、とう
てい明治の作品とは思えない。な
にか新鮮な響きで迫ってくる。前
掲の「宿屋安けし」の作品はこの
砲兵士官の歌に続いている。本紙
前号でもふれているように、この
宿屋は果たして旭川駅前北越屋
旅館であったのかどうか。北越屋
の後継者で、筆者のクラスメート
田辺英助君が旭川市大町に健在な
ので、照会の手紙を出した。こん
な返事をちょうだいした。

「啄木は小樽日報を短期間で退
社、同社社長、白石義郎の経営す
る釧路新聞に見込まれて赴任の途
中、明治四十一年一月二十日、旭
川に立ち寄ったのです。旅館は北
越屋でなく、布目喜蔵さん経営の
宮越屋で白石社長とともに投宿し
ました。当時、三條九丁目にあつ
た旭川新聞に立ち寄り詩人の野口
雨情を訪ねていますが、何かがあ
り会えずじまいで、翌朝六時半の
汽車で釧路に向かいました。この
おりいくつかの歌を詠んでいます
が――」

今夜こそ思ふ存分泣いてみむ
と

泊りし宿屋の

茶のぬるさかな

水蒸気

列車の窓に花ごと凍てしを染
むる

あかつきの色

宮越屋には次男の布目敬二さん
がいて、旭川新聞の写真記者とな
り活躍しました。啄木の泊った部
屋は駅に面した二階で、駅前広場
には馬小屋、馬つなぎ、井戸があ
ったとのこと。井戸だけは私
も記憶しています。宮越屋は第二
次大戦で鉄道の寮に売られました。
宮越屋は長男が奥さんとともにそ
の後、宮越屋薬局を旭町三丁目で
経営していました

「私の方の北越屋には昭和十三
年一月、演出家、杉本良吉ととも
にサハリンへ亡命した女優、岡田
嘉子が二泊しています。デパート
のマルイ今井で女性用のスキー・
ズボンを買ったそうです。旭川新
聞の布目写真記者が杉本・岡田の
日本最後の写真を撮っています」
さすが地元事情通である。し
かも、正確を期すため、田辺夫人
がわざわざ旭川市の資料室へ出か
けていつて調べてくださった由。
改めて御礼申し上げたい。それに
しても啄木と旭川、「船頭小唄」の
雨情と旭川……もつともつと知っ
ておきたい現代史があるようだ。
啄木の名調子をもう一首だけ。

しらしらと氷かがやき

千鳥なく

釧路の海の冬の月かな



校生六人が勢ぞろい、町の祭りに
参加してテレック、テレック……。
案外に「内地」の伝統芸能はこん
な具合で生まれて伝承されてきた
のでは。

中国ハルビンと

友好都市に

菅原市長を団長とする旭川市友
好訪中国の一行十一人は六月六日
から十二日まで中国東北部のハル
ビン市を親善訪問、索長有市長ら
と交流した。

このあと索市長に替わった汪燾
市長が来旭、友好都市提携の議定
書を交換、汪市長に「国際親善名
誉市民」証を贈った。

旭川ライブジャム95

「旭川ライブジャム95」は七月
三十日、江丹別の若者の郷で開催。
中西圭三、谷村有美、バブルガム
ブラザーズ、鈴木聖美、上田正樹

らが出演。ただし一般、高校生以
上は有料で五千五百円。

「花フェスタ95

旭川」も

「花フェスタ95旭川」(写真)は
七月二十六日から三十日まで、常
磐公園、駅前広場、買物公園を会
場に開幕。ペゴニア、インパチエ
スなどの花のほか、レンギョウ、
ツツジ、ムクゲ、ローバイなどの
植栽もあり、花いっぱい旭川を
盛りあげた。



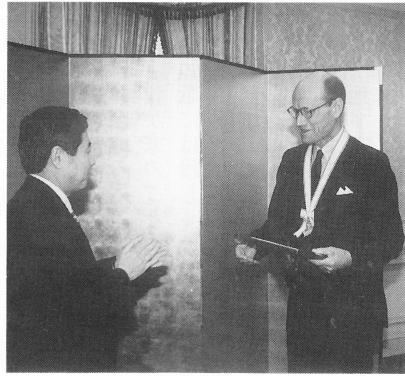
みどりと花で 飾ろう

みどりと花をと、いま神居町忠
和に十五・五ヘクタールに「忠和
公園」の整備が着々と進められて
いる。総工費三十六億七千二百万
円で、コミュニティ体育館、健
康運動相談所、多目的広場、ジョ
ギングコース、水上トリムコース、
パーク・ゴルフ・コースなど。完

成は平成十二年度。

米国姉妹都市と交流

旭川市の姉妹都市、米国ブルー



ミントンとノーマルの両市から高校生らの親善ミッション三十人がノーマル市のセント・キヤラカー市長の引率で平成七年七月三十日

▼平成六年度決算

（6年9月1日～7年8月31日）

（収入の部）	
繰入金	七五二、三一八円
年会費	九一四、〇〇〇円
懇親会費	四六〇、〇〇〇円
名簿売上代金	二七、三〇〇円
寄付金	二六五、〇〇〇円
広告代	三四〇、〇〇〇円
雑収入	一、六七〇円
合計	三、七六〇、二八八円
（支出の部）	
懇親会費	一、六九三、五〇六円

に米旭、八月一日には七條通八丁目の緑通を「ブルーミントン・ノーマル広場」とする命名のオープンス・セレモニーに参加した。市では同市長に「旭川市国際親善名誉市民」の称号を贈った。一行は地元と親善野球などを行って交流、

印刷費	五九七、四〇〇円
通信費	一五四、四五〇円
会議費	八三、七〇一円
交際費	五六、〇〇〇円
事務費	一〇、五七八円
手数料	一五、五一一円
繰越金	一、一四九、一四二円
合計	三、七六〇、二八八円

以上の会計事項について監査の結果、適正に処理されているものと認めます。

平成七年一月十六日

監事 黒崎 弘
植木 宏昌

五十嵐官房長官が突然の引退表明

郷土のホープと目された代議士、五十嵐広三官房長官、元建設相は平成七年八月二十八日、地元旭川市で記者会見、今期限りで政界を引退すると発表した。

引退の理由として①政治家として二期も大臣を勤め十分に燃焼したこと②政党不信の中で思い切った政界再編、世代交代が不可欠であり、引退して新しい人に新しい政治面を開いてもらうのが一番と考えた③社会党には「七十歳定年制」があり、あと一年を余すところで引退したい。人間に老いはさけられないが個人差があり、年だ

けで区切られない、機械的に七十歳で区切るのはいかなるものかとの反論も出た。

五十嵐氏のキャリアについては本紙15号で詳述したが、旭川商業を卒業した生粋の旭川っ子で、道議、旭川市長をへて一九八〇年に代議士に初当選、五期勤め、一時は次期社会党委員長をとの声も高かった。

しかしこんどの引退で、北海道の生んだ初の官房長官は消え去ったわけだ。

その五十嵐さん、官房長官の末期に日本道路公団が九州自動車道

八月三日まで滞在した。

また、旭川夏まつりに八月四日、来旭したスウェーデンのマグナス・バアルクブイスト駐日大使（写真）にも「国際親善名誉市民」の称号を贈呈した。

の新聞広告で北海道ないし旭川を無視したように扱ったので、怒って反論するなど人一倍にふるさと愛に燃えた選良といえた。長い間ご苦労さま。

◎事務局からのお願い

平成7年度（同年9月1日～8月31日）の年会費は第19回総会参加のおり、申し受けましたが、未納の方には、本紙「ななかまど」とともにを送りした払込票で早目に納入を。

＜事務局日誌＞

◎9月6日 会計監査・第1回幹事会
▽10月4日 実行委員会
◎10月15日 実行委員会
◎10月18日 第17回総会・懇親会
◎平成7年1月26日 第2回幹事会
◎4月8日 北海道ふるさと会連合会総会出席

編集後記

▽東京旭川会の中には篤志家はあるもの。今号で三浦規さんに登場願った。そのお知り知ったのは旭師の北海道教育大旭川校の代表者は「校長」でも「学長」でもなく旭川分校当時そのまま「分校主事」というのだそう。分校などといまどき、どこか田舎の分教場みたいですね。教育学以外の学部を併設しないと大学にしないというのも理解できないが、分校主事などとは差別的用語では」と三浦さん。旧旭師の場合、小学校高等科二年卒で入学、五年を卒業、さらに専攻科で一年、計八年かかる。いまなら短大卒と同じ修学年限だ。師範校そのものは差別コースともいえた。しかし旭師出の先生方が北の文化をがっしり支えたのは事実だろう。

▽旭川市がPRを兼ねた「観光大使」を旭川出身者や縁故ある方々に委嘱した。出身者はともかくとして、歌手伊東ゆかりさんのように、すっかり旭川っ子になりきって愛してくださる、文字通り「ゆかり」とはありがたいもの。都城の池永孝さんのように来旭三十七回という旭川ファンもいる。これらの方々はいわゆる「サポー

席◎4月21日 旅行委員会◎6月10日 旅行委員会◎6月29日 7月2日 第10回郷土訪問の旅

■「関西旭川会」住所 〒542 大阪市中央区西心斎橋1の12の13 アサノビル関西旭川会・代表浅野寛

ター」である。といってこの大使各位はボランティアで無報酬である。が、すこしくらいは何かをして謝意を表してはいいかなものか。心のこもった何かを。

▽石川啄木と旭川について故郷の住人、田辺英助さんを煩わせた。啄木と旭川のふれあいは一泊二日の旅だけ。旭川に北の鎮の第七師団が創設されたのが明治二十九年、啄木の旭川入りはそのずっとあとのこと。当時、「旭川新聞」に詩人・野口雨情がいたことはほとんど伝わっていない。雨情はわがふるさと旭川でどう生きたのか。彼の作品に北石狩の風土はどう投影しているのだろうか。もっと郷土文化の見直しが必要。

▽本紙編集で欠かせない写真は、総会については毎日新聞社OBカメランの中西浩さんを煩わしている。旅行などでは本会幹事の堀川和延さんのご協力を得ている。改めて深く謝意を表したい。また、この会報へのご注文をお聞かせください。ハガキでけっこうですから会員各位の積極的な声を。

（Z）

編集委員 田村昌士、大久保藤次郎、須藤智恵子、高橋文子、伊藤一男（順不同）